春色恋女房

神保五彌校

古典文庫

春色恋白波

神保五彌校

古典文庫

古典文庫第二四二冊

昭和四十二年九月二十日印刷発行　（非売品）

波白恋色春　二

校者　神保五彌

発行者　吉田幸一

東京都板橋区熊野町三四

印刷者　帝都印刷製本株式会社

発行所　東京都（王子局区内）北区西ケ原三ノ三四　古典文庫

電話（九一〇）二七一七

振替口座東京一四五九七番

春色恋白波

為永春水作

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

春色恋白波序

甘脆肥醲。腐腸之薬而羨黎之士。却言傷腸之毒也。何則流涎之輩。饕餮之徒。以有害胃敗肺也。然則薬言之毒亦可矣。若能立之規節。則未曾不為薬也。為永先生以著作為業不嘗漕泊不附驥尾。世人已知焉矣。待予言。而先生毎著一書語余説余〻常歎美其錦心綉口咀英嚼花。上自王公妃妾。下至俳優妓女。尽揣其恋思情。抱彼注茲。常出人意表。更存教誨。欲令読者解人情。知廉恥。妬婦潔薄夫。厚故至春閨秘戯之処。明不形真状。而情必有余。乃自得其妙与他人以浮辞淫

語。誘ニ情一欲一之類甲大異ニ矣。而孤一陋愿一慤老一翁。知レ彼不レ知レ此ヲ槩為乙誘ニ情一欲一之書甲至レ令乙春一暁一懐ニ深一怨一之娘。秋一宵発ニ幽一情一之婦不甲レ読与三楽レ言ヒ毒也何以異乎。嗚一呼。可レ歎哉今一春所レ著春一色恋一能一白一波先一生有レ為而雖丁仮ニ以乙蒙一古軍ニ我

皇一国而戦敗甲為丙レ拠。其趨則無レ異レ常読一者択ニ其一善一従レ之。其不レ善者而改レ之其為レ薬蓋不レ少。是レ先一生一之一宿一志也。及ニ書一成一。為ニ之序一云

干時天保九戊戌仲秋

江戸　陽風亭柳外撰

倭なでしこ漢よもぎと冠字の対をならべたれども。いまだその由来をくはしくせず。わづかに推量のあさはかなるを外題とし。漢土の貴姫を。本朝の処女風にそだて。倭の好男子を豪傑の棟梁とし。美人の癖に丈夫めく。堅田の小雀といふ勇婦を出し。花美なる唄女の小雛といへるを。姫君のやうな志操につくり。源五郎と名号忠義の壮年に。ぬれ衣着せし筑紫の白波。茶屋娘にも本名ありて。例の人情ものがたりとは。はるかに趣向をかえたれども。看宮児女童蒙にはおなじみの。その口調に同じくよませ。古風を当世の一思案。新に一流の冊子をあらはすものは

東都人情本一家の元祖

金竜山人狂訓亭

為永春水㊞

卷中浄書　江戸　滝野音成

柳塘漠漠暗啼鵜　一鏡晴飛玉有華
好是夜闌人不寝　半庭寒影在梨花

玉握る手のくつろぎや筆はしめ　笑訓亭　為永春友
朧夜や在郷家のはなし声　狂花亭　為永春蝶
寝覚よき春狂言や蝶千鳥　狂詠舎　為永春暁
唐土までもおもひやらるゝ春日哉　狂文亭　為永春江

○口絵（五ウ―六オ）詞

弘安四年、蒙古国より筑紫に来り、博多の沖なる姫島にて打死したる、元朝の女大将博文君の処女、おさなくして日本に渡海し、成長して於

粂といふ婀娜ものなり。

弘安四年の軍(いくさ)に元朝(もろこし)の百万騎と戦ひ、勇名をふるいて打死なせし、長門の国の住人赤間太郎重国の嫡男阿若丸(くまわか)、成長の後家を再興なさんために、千辛万苦して軍用金をあつめんとなす豪傑、異名を筑紫の権六と呼。

明て見る二階の窓の柳哉　　尾州　為永春蝶

○口絵（六ウ―七オ）詞

山里の梅の匂ひにおもふかな人もかたちによらぬならひを

狂花亭主人

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

色も香もふくみてやさし梅の花　　為永春友

○口絵（七ウ―八オ）詞

鎌倉雪の下若宮代地博多の産物問屋箱崎屋徳兵衛実ハ筑紫の権六。

赤間家の忠臣博多帯刀。

元朝（もろこし）より漂泊して、筑紫の姫島に住（すみ）たる朱太郎、後に鎌倉米町の眼科医師、平戸一貫斎。

名月や琴の音かよふ峯の松　　笑訓亭

凡此譚（およそこのものがたり）は、文化年中江戸芝居中村座におゐて、高麗大和雲井白浪

ト言名題にて、故人訥子（二代目訥子幼名源之助）初て筑紫の権六の役を勤めたり。堅田の小雀は二代目岩井半四郎（当時の杜若）小鮒の源五郎は二代目尾上松助が勤む（今時の菊五郎梅幸の叟なり）石川碁右衛門の役は今の松本幸四郎にて古今稀なる大当をなしたり（狂言作者はしかと覚へず。たしか奈川七五三助と雀屋南北にや）右狂言にもとづきて作る。そは京大坂にて、当時も専ら行はるゝ迚、書賈の好みに任せ、趣向は更に異るといへども、其役名を仮用し、新に例の人情本の口調を以て、媛児嬰童の伽草紙とはなすものなり。

東武　狂訓亭　為永春水再誌　㊞

倭寵愛児
漢余模妓

春色恋志良那美巻之一

江戸　為永春水作

発端

昔人皇九十代後宇多天皇の御宇、建治二年の夏かとよ、蒙古国の軍使本朝へ貢を催促して合戦に及びしかば、鎌倉の将軍惟康親王、執権北条相模守時宗の下知に依て、諸軍西国へおもむき、夷賊の大将阿呂志といふ者を生捕、由井浜に於て首を刎、獄門にかけ、下宮の唐人にこれを視せて追返しければ、彼国にては大ひに怒り、元の世祖皇帝国衷の数を尽し、七十六万の大軍を揃へ、外聞には百万余騎と言触し、西

海の浦〻に押寄、既に日本の危かりし所に、神力応護の奇瑞顕はれ、忽ち伊勢の宮居より吹出したる神風に、蒼海原を陸地のごとく漕もならべし賊船を、木の葉の散ゆくさまに等しく吹払ひ、逆浪天に打上て、さしも勢ひ猛かりし賊軍ことごとく海の底にぞ沈みける。これより、異国の貴賤とも我神国の威風におそれ懲て、再度仇をなさず。津〻浦〻も穏に漸く浪風治りしが、此合戦の騒ぎに紛れ、運と不運の善悪不祥も多かる中に、和漢同じ形容の憂艱難、実一雙の支こそあれ。爰に長門の住人にて赤間太郎重国といふ武士ありしが、弘安四年の一大凶変、まだ神風の助もなく、異賊の鋒先尖くして、殊には百倍の大軍ゆゑ、心は矢武にはやれども竟に不叶、九刄勢惣敗軍と追立られ、皆散〻に落行を看も悔しく歯がみをなし、駒乗居たる赤間の太郎、兜

を脱て投捨つゝ必死を覚悟の只一騎、四尺に余る陣太刀を真向に差かざし、勝ほこりたる蒙古の勢に切て入んとなせし所に、郎党一人走来り、轡にすがり押とゞめ、こはものに狂ひて在するか。そも此度の合戦は主君一個の恥ならず。期して軍も候べきに、など打死を急がせたまふぞ。一先此所は落延て、と言はせも果ず首を振り、九牛の一毛にも算へに足らぬは知りたれど、松浦党が夜討の大勇、敵を亡し尽さねども、皇国の人の魂とは誰か賞ざる叉あるべき。今猶日本の人〻が、松浦の一族の勇にならひて必死の戦ひをなすものならば、異国の夷賊等が鋒先にあへなくも崩されんや。我一人なりとも死をきはめ、せめては毛唐人どもに目を覚させ、皇国の武備の一助となさん。汝は古さとに立のきて、阿若母子を守立くれよ、と言よりはやく数万の敵

中に割て入り、四角八面に敵を討こと二十余騎、手を負せしは数しれず、暫時ながらも異国勢に胆を冷さする功を立しが、続く味方のあらざれば頓て討死を遂しとぞ。されば一人の勇なれども、赤間の太郎の血戦に異賊は其日の軍をとゞめ、九州勢は気を励し、乱れし備を立直し、後度の戦ひを心がけ、死すとも重ては引まじと、拳を握りて待明す七月朔日の暁より、吹出したる神風は天地も轟く震動にて、海陸の蒙古勢唯一時に亡び失せ、残るはわづかに百分一、浪に漂ひ逃しりぞく。同じ二日の夜なりしが、筑前博多の浦よりは十五里余りの海上を沖の方へ隔りし、姫嶋といふ礒際の岩を小楯にまふけたる海士の苫家を立出て、八重の汐路をうちながめ、吐息をなして異国の大将、白銀鎖の鎧着て、赤地の錦の袍に紅なひの裾細を丈長くつけ、緑の黒

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com